

チノ語悠楽方言の間接疑問文に関する覚え書き

林 範彦

キーワード: チノ語、チベット・ビルマ諸語、間接疑問文、直接疑問文、補足節、文末標示、節末標示

1 はじめに

記述言語学の趨勢を鑑みると、間接疑問文の研究は直接疑問文のそれに比べてあまり積極的になされていないように思われる。直接疑問文の構造を詳細に検討するだけでも非常に多くの難問が生じてくる。そのため、更に多くの問題をはらみうる間接疑問文にまで論究できない事情があろうかと考えられる。疑問文の問題に加えて、発話の間接性とは何かというもう1つの問題を同時に解明しなければならないからである^{注1}。

筆者はこれまで中国雲南省景洪市で話されるチノ語悠楽方言^{注2} (チベット・ビルマ語派人口・ビルマ語支) の記述研究を行ってきた^{注3}。しかし、とりわけ間接発話に関する問題には十分な検討を加えてこな

^{注1} 言語類型論的な観点から、Sadock and Zwicky (1985) は 'dependent interrogatives' としてこの問題を記述している。しかし、主節動詞の意味と補足節との構造的な関係等に若干言及する程度である。この論文の「改稿版」とも言える König and Siemund (2007) では間接疑問文そのものに対してほとんど言及していない。

また一方で、英語や日本語、漢語など比較的研究の進んだ言語については、間接疑問文の研究も進んでいる。ただし、やはり直接疑問文に比べてより進んでいるとは言えないだろう。日本語の間接疑問文に関する研究は高宮 (2003, 2005) などを、漢語普通話に関しては邵 (1996) などを参照されたい。

^{注2} チノ語は中国雲南省景洪市に主に居住するチノ族の話す言語である。2000年の人口統計によるとチノ族の人口は中国全土では20,899人である。そのうち景洪市には19,250人が暮らしている。しかし、実際にチノ語を流暢に話せる人口は不明である。チノ族は周辺諸民族に比して母語の保有率は高いと考えられるが(戴 [主編] 2007)、すでに漢語雲南方言しか話せないチノ族も少なくない。チノ語の話者総人口は多く見積もって1万数千人程度にとどまると考えられる。

チノ語は大きく悠楽方言と補遠方言の2つに分かれる。話者人口の約9割が悠楽方言を話すとされる(蓋 1986)。

以下に、筆者の分析によるチノ語悠楽方言の音素目録を示す。

[チノ語悠楽方言の音素目録]

チノ語の音素目録は、[子音] /p, ph, t, th, k, kh; ts, tsh, tʃ, tʃh, tɕ, tɕh; m, m̥, n, n̥, ŋ, ŋ̥; l, l̥; f, v, s, z, ʃ, r, ʑ, j, x, ɣ; (w) /, [母音] /i, e, ø, ε, œ, a, ə, ɔ, ɤ, o, u, u/ である。声調素は /55, 44, 33, 35, 42/ である。音節構造は頭子音 + 介音 + 主母音 + 末子音/声調で構成される。またチノ語では m, m̥, n, ŋ が成節鼻音 (syllabic nasal) となりうる。

なお、本文中で同じ形態素ながら調値が相互に異なることがある。これらは環境によって声調が交替する場合である。その場合、本文中で引用する際、声調を表記しないことがある。

更に、チノ語文法の言語類型論的特徴としては以下のとおりである。基本語順は SOV で、形容詞は名詞の後ろから修飾し、関係節は名詞の前から修飾する。チノ語は膠着性の高い言語であり、動詞が述部となる際、動詞語根を中心に多くの接尾辞類・接頭辞類が付加しうる動詞複合形式 (verbal complex) を構成する。

以上、音韻ならびにチノ語文法全体に関する概要については林 (2006, 2009) を参照されたい。

^{注3} 本稿で取り扱うデータは筆者が中国雲南省景洪市で2003年から2009年にかけて断続的に行った現地調査に基づいている。主にデータを提供してくださった王阿珍氏 (1980年生、女性)、玉納氏 (1950年頃生、女性) に心から感謝申し上げます。なお、2003年および2005年の調査は日本学術振興会科学研究費補助金 (特別

かった。またすでに林 (2007b) としてチノ語悠楽方言の直接疑問文について記述した。だが、そこでも間接疑問文に関しては全く触れていない。林 (2007a, 2009) ではチノ語悠楽方言の間接疑問文について若干言及しているが、データはわずかにとどまる程度である。

本稿ではチノ語悠楽方言の間接疑問文について簡潔に記述し、直接疑問文や他の補文を含む節などとの構造的な共通点・相違点について検討したい。ただし、本稿での記述および分析はいまだ初歩的な段階であることを断っておく。

2 先行研究と直接疑問文について

2.1 先行研究とその問題点

チノ語悠楽方言における文法全般にわたる先行研究としては蓋 (1986) と林 (2007a, 2009) がある。

蓋 (1986) では直接疑問文に関する助詞について羅列的に記述してある。しかし、間接疑問文の構造については言及が一切ない。

他方、間接疑問文について林 (2007a, 2009) では以下のように記述した。

「『…』と尋ねた」などの文を表す場合に、チノ語でも直接疑問^{注4}的な手法と間接疑問的な手法がある。

(320) a. khɣ⁴² ɲɔ³⁵ ‘a³³tʃa⁵⁵ m³³+tʃa⁵⁵+sɔ³⁵-ɔ⁴⁴-la⁴², ɲɔ³³-mɣ³⁵.
3sg.NOM 1sg.OBL 料理 作る + 料理する + 終わる-PFT-Q 聞く-PAST

「彼は私に『ご飯を作ったのかい?』と尋ねた。」

b. ɲɔ⁴² khɣ³⁵ ɔ⁵⁵po⁴⁴ tʃhi⁵⁵ ma³³-tʃhi⁵⁵+le⁴⁴ ɲɔ³³-mɣ³⁵.
1sg.NOM 3sg.OBL 茶 摘む NEG-摘む + 行く 聞く-PAST

「私は彼/彼女にお茶を摘みに行くかどうか聞いた。」

(320a) は被質問者である「私」に対して「ご飯を作りましたか?」と直接疑問的に聞いている。一方、(320b) は「彼/彼女」に対して「お茶を摘みに行くか否か」を間接疑問的に聞いている(間接疑問文^{注5}は sans serif 体で表示している)。それらの違いは疑問文末助詞が現れているか否かである。直接疑問的にある文の中に埋め込まれている場合、単文で問われる直接疑問文と同様、疑問文末助詞((320a)の例では -la⁴²)が現れるが、間接疑問的^{注6}である場合は、(320b)のように疑問文末助詞が現れず、「動词语根-ma (否定辞)-動词语根」の形式が用いられる。

すなわち、間接疑問文であるとき、疑問文末助詞を付けると(321b)^{注7}のように非文となる。

(321) a. nɔ⁴² pja⁴² khɣ⁴² ɔ³³ ma³³-ɔ³³. 「彼が来るかどうか言いなさいよ。」
2sg.NOM 言う 3sg.NOM 来る NEG-来る

b. *nɔ⁴² pja⁴² khɣ⁴² ɔ³³-la⁴² ma³³-ɔ³³-la⁴².
2sg.NOM 言う 3sg.NOM 来る-Q NEG-来る-Q

(林 2009: 149–150)

この記述は実際には真偽疑問に関わる間接疑問文しか行っておらず、後述する間接疑問文の補足節末

研究者奨励費)の援助を、2004年および2007年、2008年の調査は日本学術振興会科学研究費補助金(基盤研究S)「チベット文化圏における言語基層の解明—チベット・ビルマ系未記述言語の調査とシャンシュン語の解読—」(研究代表者 長野泰彦)の援助を、2009年の調査は日本学術振興会科学研究費補助金(若手研究B)「チノ語の記述調査と言語接触・言語類型論から見た東南アジア諸語研究」(研究代表者 林 範彦)の援助を受けている。この場を借りて感謝申し上げます。

注4 ここでは直接疑問が従属節的に埋め込まれている場合、それを *italic* にしている。

注5 林 (2009) での「間接疑問文」は本稿での「間接疑問文の補足節」を指す。注意されたい。

注6 現時点でのデータでは直接疑問的なのは質問者あるいは被質問者のいずれかが1人称または2人称である場合が多く、間接疑問的なのは被質問者あるいは質問内容の当事者が3人称である場合が多い。

注7 (321)の例では、主節動詞 pja⁴²「言う」が補足節よりも前に現れている。実際にこのような例も特に年齢層の若い話者に散見される。

境界に関わる現象や、疑問語疑問に関わる間接疑問文については一切述べていない。

また記述上の問題も窺える。(320a)のような直接疑問的な手法は台詞が文中に埋め込まれている形式をとる。これは厳密には狭義の間接疑問文に含められない可能性が強い。本稿では(320a)のような台詞が含まれる直接疑問的な手法を排除し、狭義の間接疑問文と考えられる例のみ記述・分析を試みる。

チノ語悠楽方言の直接疑問文の構造については2.2で簡潔にまとめる。

2.2 チノ語悠楽方言における直接疑問文の構造

チノ語悠楽方言の直接疑問文の構造はすでに林(2007b)で記述した。基本的には文末に疑問を標示する助詞・倚辞を置くことによって直接疑問文は構成される。その助詞・倚辞を網羅的に列挙すると、(1)の5種類がある。

(1) $-la^{42}$, $-na^{42}$, $-a^{44}$, $-jo^{44}$, $=\varepsilon^{44}$

(1)のうち、前3者である $-la^{42}$, $-na^{42}$, $-a^{44}$ と後2者である $-jo^{44}$, $=\varepsilon^{44}$ では機能が異なる。前者は質問者が相手に対して回答を要求する意図を表示する機能が明確で、真偽疑問文、疑問語疑問文、選択疑問文を構成する。一方、後者は異なる指向性を持つ。 $-jo^{44}$ は基本的に自問を表し、回答を要求する機能を持たない^{注8}。また $=\varepsilon^{44}$ は疑念が生じたことを表すときに用いられるもので、真偽疑問・疑問語疑問だけでなく、発話者の主観を表示するのに用いられる^{注9}。

前3者の生起条件の概要をまとめると以下の(2)のようになる。なお、後2者の生起条件は現時点では特に定められない。

- (2) a. 形式的な条件として、 $-la^{42}$ は真偽疑問文の文末に生起する一方、 $-na^{42}$ は真偽疑問文・疑問語疑問文のいずれにも生起しうる。前者は述語の名詞性・動詞性に関与しないのに対し、後者は述語が動詞性を持つ場合にのみ生起可能である。 $-a^{44}$ は疑問語疑問文で述語が名詞性を持つ場合に生起する。
- b. 意味的な条件として、 $-la^{42}$ は文全体を焦点とする例に生起する傾向があるのに対し、 $-na^{42}$ は文の一部のみを焦点とする例に生起する傾向がある。

3 チノ語悠楽方言の間接疑問文の記述

間接疑問文の補文(以下では、「補足節」と呼び変える)が文の構成要素となるということは、すなわち主語あるいは目的語の位置を補足節が占めるということである。本稿ではそのうち目的語の位置を占める場合を典型的な用法と見て主たる対象とする^{注10}。

チノ語悠楽方言の基本構成素順序はSOVである。すなわち、目的語の位置に入る補足節も述語動詞の前に置かれることを意味する。チノ語悠楽方言における間接疑問文の構文パターンは以下の(3)のように模式化できる。

^{注8} 日本語でいえば、文末に置かれる「かしら」のようである。ただし、日本語の「かしら」のように、チノ語悠楽方言の $-jo^{44}$ も文脈に応じて回答を要求することがある。

^{注9} より正確には「 $=\varepsilon^{44}$ は発話者の主観を表示するために用いられ、その実際の意味・用法は文脈ならびに語用論的条件によって決定される」と記述すべきかもしれない。 $=\varepsilon^{44}$ 自体は発話の相手に対して回答を要求する機能をもたない。

^{注10} 日本語でいうところの「[彼がどのように事を運んだか]が問題だ」といったような間接疑問文の補足節が主節の主語位置に生起する例は本稿執筆時ではほとんど得られていないため、詳述は別稿に譲る。

(3) < 間接疑問文の構文パターン >: S [疑問を含む補足節] V.

一般的に、間接疑問文において主節動詞 ((3) では 'V' で表示) の意味は知覚・思考系 ('知る」「考える」「思う」「疑う」等) および伝達系 ('言う」「伝える」「話す」「聞く」等) に偏りがあると考えられる。チノ語悠楽方言もその例に漏れない。

また一般言語学的に、直接疑問文と間接疑問文では疑問の性格上相互に大きく異なる。典型的な直接疑問文は発話者が相手に対して回答を要求する^{注11}のに対し、典型的な間接疑問文は発話者は聞き手に対して回答を要求しない。後者は基本的に発話者が何らかの疑問を持っていることを聞き手に対して表明しているだけに過ぎない。その点で両者を共通の「疑問文」というカテゴリーにまとめるべきか否かが問われるべきところであろう。しかし、本稿では両者は何らかの意味/機能上あるいは構造上の共通性があると考え、記述・分析を進めていく。

以下では、疑問を含む補足節を中心に、間接疑問文の構造を記述していく。具体的に記述に入る前に、間接疑問文を便宜上意味的に2種類に下位分類する。疑問を含む補足節が意味的に真偽疑問に関与している間接疑問文を「間接真偽疑問文」と呼び、疑問語疑問に関与しているものを「間接疑問語疑問文」と呼ぶ。前者を3.1で、後者を3.2で記述する。なお、以下の例文中の補足節は[]で表示することとする。

3.1 間接真偽疑問文

本小節では間接真偽疑問文を記述する。まず、代表的な補足節を含む例である(4)を見られたい。

- (4) a. $\eta\text{ɔ}^{42}$ [ja⁵⁵ŋ⁴⁴ ʃi³³xao³⁵ =e⁴⁴] kjo³³-mɛ³⁵.
1SG.NOM 今日 10日 =POSS 思う-PAST
「私は今日10日だと思った。」
- b. $\eta\text{ɔ}^{42}$ [ja⁵⁵ŋ⁴⁴ ʃi³³xao³⁵ ηw^{33} mo³³- ηw^{44} =e⁴⁴] $\eta\text{ɔ}^{33}$ -mɛ³⁵.
1SG.NOM 今日 10日 COP NEG-COP =POSS 聞く-PAST
「私は今日10日なのかどうかと聞いた。」

(4a) は補足節が平叙文的であるのに対し、(4b) は補足節が意味的に真偽疑問を含むものとなっている。すなわち、後者は間接真偽疑問文である。両者に共通しているのは、補足節が後置詞 =e⁴⁴ で閉じられていることである。後置詞 =e⁴⁴ は主に名詞句に後接し、所有者を標示するのに用いられる。一方で、Hayashi (in print a) で述べられているように、節末に生起し、補文(本稿での補足節)末の標示ならびに話者の推測や義務などのモダリティーを表すことができる。

次に特徴的なのは、(4b) においては、補足節末で2個のコピュラが生起していることである。これは <COP mo-COP> となっていると解釈され、コピュラの肯定形式と否定形式の並列であると見なせる。

このコピュラの肯定形式と否定形式の並列は次の(5)にも同様に当てはまる。

- (5) khɤ⁴² $\eta\text{ɔ}^{35}$ [a⁵⁵san⁴⁴ lo³³si⁵⁵ ηw^{33} mo³³- ηw^{44} =e⁴⁴] $\eta\text{ɔ}^{33}$ -mɛ³⁵.
3SG.NOM 1SG.OBL アサン 先生 COP NEG-COP =POSS 聞く-PAST
「彼は私にアサンが先生かどうか聞いた。」

^{注11} 相手に対して回答を要求する疑問文を特に「質問文」として区別する立場もあり得る。しかし、本稿では詳細を論ずるに至らない。

(4b, 5) の例はいずれも補足節内部の述語 (各例の下線部^{注12}) が名詞性を持っている。これまでをまとめれば、名詞性をもった述語が補足節に含まれ、間接疑問に関与する際、述語の後でコピュラの肯定形式と否定形式が並列し、補足節末で所有格後置詞 =ε⁴⁴ によって補足節の境界を標示しうる、ことが分かる。一方で、補足節内部が動詞性をもった場合は以下の (6) のようになる。

- (6) a. khɿ⁴² ɲɔ³⁵ [nə⁴² le³³ mɔ⁵⁵-le³³ =ε⁴⁴] ɲɔ³³-mɛ³⁵.
 3SG.NOM 1SG.OBL 2SG.NOM 行く NEG-行く =POSS 聞く -PAST
 「彼は私にあなたが行くのかどうか聞いた。」
- b. ɲɔ⁴² [a⁵⁵san⁴⁴ tʃɔ³⁵ mɔ³³-tʃɔ³⁵] mɔ⁵⁵-suw⁵⁵jɔ⁴⁴-a⁴⁴.
 1SG.NOM アサン いる NEG-いる NEG-知る
 「私はアサンがいるのかいないのか知らない。」

(6a) および (6b) とともに、補足節内部の述語は動詞性を持つ。いずれも補足節内部で動詞の肯定形式と否定形式が並列している。(6a) では補足節の境界を所有格後置詞 =ε⁴⁴ によって標示している。他方、(6b) では =ε⁴⁴ が生起していない^{注13}。(6a) の =ε⁴⁴ も生起しなくてもよい。

ここで振り返ると、補足節内部の述語が名詞性を担っているときはコピュラの肯定形式と否定形式が補足節内部で並列した。チノ語悠楽方言のコピュラは Hayashi (2009, in print b) でも述べたように、形態統語論的に動詞であると考えられる。このことから、チノ語悠楽方言の間接真偽疑問文は補足節内部の動詞性/名詞性に関わらず、動詞の肯定形式と否定形式が並列する、と整理することができる。

ただ、一般に補足節内部の述語が名詞性を担っているときは補足節末の境界を明示化する目的で =ε⁴⁴ が通常生起するのに対し、補足節内部の述語が動詞性を担っているときはその生起が随意的であることは注意しておくべきことであろう。

さて、やや問題があると言えるのは、補足節内部の述語が形容詞である場合である。チノ語悠楽方言では形容詞の引用形 (肯定形とも考えられる) が [a-/ la-/ jɔ- + 動詞語根] の形式をとる (林 2009)。接頭辞 a-/ la-/ jɔ- はいずれも名詞化の機能を持つ。そのため、形容詞の引用形はすべて形態的には名詞性を持つと言える^{注14}。

一方、形容詞の否定形は [ma- ~mɔ- + 動詞語根] の形式をとる。この形式は動詞の否定形式と全く同一であるため、形容詞の否定形は形態的に動詞性を持つと考えられる。

補足節内部の述語が形容詞であるような例を以下の (7) に掲げる。

- (7) a. ɲɔ⁴² khɿ³⁵ [ji³³tʃho⁵⁵ lo³³ mɔ³³-lo⁴⁴ =ε⁴⁴] ɲɔ³³-mɛ³⁵.
 1SG.NOM 3SG.OBL 水 熱い NEG-熱い =POSS 聞く -PAST
- b. ɲɔ⁴² khɿ³⁵ [ji³³tʃho⁵⁵ a³³-lo⁵⁵ ɲu³³ mɔ³³-ɲu⁴⁴ =ε⁴⁴] ɲɔ³³-mɛ³⁵.
 1SG.NOM 3SG.OBL 水 PREF-熱い COP NEG-COP =POSS 聞く -PAST
- c. *ɲɔ⁴² khɿ³⁵ [ji³³tʃho⁵⁵ a³³-lo⁵⁵ mɔ³³-lo⁴⁴ =ε⁴⁴] ɲɔ³³-mɛ³⁵.
 1SG.NOM 3SG.OBL 水 PREF-熱い NEG-熱い =POSS 聞く -PAST
 「私は彼/ 彼女に水が熱いかどうかを尋ねた。」

注12 本稿では後述するように「述語」と「述部」の区別を行っている。「述語」は節内で主語に対応する単位である。「述部」は「述語」を含み、より更に大きな単位であると考えられる。(4b) であれば、ji³³xao³⁵ が「述語」、ji³³xao³⁵ ɲu³³ mɔ³³-ɲu⁴⁴ が「述部」となる。

注13 (6b) においても =ε⁴⁴ は生起してもよい。

注14 一般にチノ語悠楽方言の形容詞における動詞語根は単独で生起することができない。何らかの接頭辞的要素が付加された形でしかほとんどの場合現れることができない。

(7a, b) は容認可能なのに対し、(7c) は容認不可能である。なお、(7a, b) のいずれの例にも当てはまることだが、補足節末に置かれる所有格後置詞 $=\varepsilon^{44}$ の生起は随意的である。また、(7) のいずれの例も現時点の調査では文の意味において有意な差異は認められない。

チノ語悠楽方言で「熱い」を表す形容詞引用形は $a^{33}l_0^{55}$ である。これは(7)の例でも明示したように、 $a^{33}-l_0^{55}$ のように形態素分析が可能であり、 $a^{33}-$ は名詞化接頭辞、 l_0^{55} の部分は動詞性を持った語根である。

(7a) では、形容詞の語根の肯定形式と否定形式が並列している。上述したように、形容詞の語根部分は動詞性を持つ。よって、この現象は補足節内部の述語が動詞であった場合と同様であると見なせる。

また(7b) は形容詞引用形の後にコピュラの肯定形式と否定形式が並列している。形容詞引用形は形態統語的に名詞性を持つと考えられることから、これは補足節内部の述語が名詞であった場合と同様であるとえられる。

容認不可能となっている(7c) は補足節内部で形容詞の引用形と否定形式が並列している。チノ語悠楽方言において形容詞の肯定形式とはすなわち引用形であるため、単純に肯定形式と否定形式の並列により補足節末の疑問標示が可能であるとすれば、(7c) も容認可能であると予測されるはずである。しかし、実際にはそうではない。これはおそらく形容詞の肯定形式、つまり引用形が形態的に名詞性を有する一方、形容詞の否定形式が形態的に動詞性を持つためである。言い換えれば、名詞性要素と動詞性要素が並列しているのは本言語において容認しにくいということであろう。

ここでまとめると、間接真偽疑問文を作る際、補足節内部の述語が形容詞である場合、形容詞語根、すなわち動詞語根を取り出して、その肯定形式と否定形式を補足節末に並列させるか、形容詞引用形の後にコピュラの肯定形式と否定形式を並列させるかのいずれかの手法がとられる。

このような補足節内部の述語が形容詞である際の原則は以下の(8, 9)でも守られる。

- (8) a. $kh\gamma^{42} \quad \eta\sigma^{35} \quad [kh\gamma^{44} \quad z\sigma^{55} \quad ku^{55} \quad \underline{mjo^{33}} \quad \underline{m\sigma^{33}-mjo^{44}} \quad =\varepsilon^{44}] \quad \eta\sigma^{33}-m\varepsilon^{35}$.
 3SG.NOM 1SG.OBL あれ 子供 (背が) 高い NEG-(背が) 高い =POSS 聞く -PAST
- b. $kh\gamma^{42} \quad \eta\sigma^{35} \quad [kh\gamma^{44} \quad z\sigma^{55} \quad ku^{55} \quad \underline{la^{55}-mjo^{42}} \quad \eta\mu^{33} \quad m\sigma^{33}-\eta\mu^{44} \quad =\varepsilon^{44}] \quad \eta\sigma^{33}-m\varepsilon^{35}$.
 3SG.NOM 1SG.OBL あれ 子供 PREF-(背が) 高い COP NEG-COP =POSS 聞く -PAST
- c. $*kh\gamma^{42} \quad \eta\sigma^{35} \quad [kh\gamma^{44} \quad z\sigma^{55} \quad ku^{55} \quad \underline{la^{55}-mjo^{42}} \quad \underline{m\sigma^{33}-mjo^{44}} \quad =\varepsilon^{44}] \quad \eta\sigma^{33}-m\varepsilon^{35}$.
 3SG.NOM 1SG.OBL あれ 子供 PREF-(背が) 高い NEG-(背が) 高い =POSS 聞く -PAST
 「彼/彼女は私にあの子は背が高いかどうかを聞いてきた。」

- (9) a. $\eta\sigma^{42} \quad kh\gamma^{35} \quad [kh\gamma^{44} \quad k\sigma^{55} \quad t\sigma^{44} \quad \underline{x\gamma^{55}} \quad \underline{m\sigma^{55}-x\gamma^{55}} \quad =\varepsilon^{44}] \quad \eta\sigma^{33}-m\varepsilon^{35}$.
 1SG.NOM 3SG.OBL あれ 服 大きい NEG-大きい =POSS 聞く -PAST
- b. $\eta\sigma^{42} \quad kh\gamma^{35} \quad [kh\gamma^{44} \quad k\sigma^{55} \quad t\sigma^{44} \quad \underline{la^{55}-x\gamma^{44}} \quad \eta\mu^{33} \quad m\sigma^{33}-\eta\mu^{44} \quad =\varepsilon^{44}] \quad \eta\sigma^{33}-m\varepsilon^{35}$.
 1SG.NOM 3SG.OBL あれ 服 PREF- 大きい COP NEG-COP =POSS 聞く -PAST
- c. $*\eta\sigma^{42} \quad kh\gamma^{35} \quad [kh\gamma^{44} \quad k\sigma^{55} \quad t\sigma^{44} \quad \underline{la^{55}-x\gamma^{44}} \quad \underline{m\sigma^{33}-x\gamma^{44}} \quad =\varepsilon^{44}] \quad \eta\sigma^{33}-m\varepsilon^{35}$.
 1SG.NOM 3SG.OBL あれ 服 PREF- 大きい NEG-大きい =POSS 聞く -PAST
 「私は彼/彼女にあの服は大きいかどうか聞いた。」

(8) では形容詞 $la^{55}-mjo^{42}$ 「(背が) 高い」が、(9) では形容詞 $la^{55}-x\gamma^{44}$ 「大きい」が補足節内部の述語となっている。いずれも接頭辞 $la-$ を除去した部分である mjo^{42} と $x\gamma^{44}$ は動詞語根となる。これらの補足節内部での振る舞いは(7)で見た場合と全く同様である。

以上から、補足節内部の述語が名詞・動詞・形容詞のいずれに関わらず、間接真偽疑問文について以下の特徴 (10) が現時点で結論付けられる。

- (10) a. 補足節末境界を明示するために所有格後置詞 =ε⁴⁴ が生起しうる
 b. 補足節末において動詞の肯定形式と否定形式が並列される

ここで、述語よりも 1 段階上位の単位として「述部」を設定すると、補足節内部の述語が名詞の場合も動詞性をもったコピュラの肯定形式と否定形式が並列されることから、補足節内部の述語が名詞性であれ、形容詞性であれ、補足節内部の節末述部形式は動詞句 (VP) であると結論づけられる。

3.2 間接疑問語疑問文

本小節では間接疑問語疑問文について記述する。以下の (11, 12) を見られたい。

- (11) a. ɲɔ⁴² [nɔ³⁵ kɔ⁵⁵tʰ⁴⁴ kha⁵⁵-lo⁴⁴ -a⁴⁴/ =ε⁴⁴] ɲɔ³³-mɛ³⁵.
 1SG.NOM 2SG.OBL 服 どれ-ように -PART/ =POSS 聞く -PAST
 「私はあなたの服がどんななのか聞いた。」
 b. ɲɔ⁴² khɻ³⁵ [jɔ³³ma⁵⁵ khɔ³³su⁵⁵ -a⁴⁴/ =ε⁴⁴] ɲɔ³³-mɛ³⁵.
 1SG.NOM 3SG.OBL 3PL.NOM 誰 -PART/ =POSS 聞く -PAST
 「私は彼/彼女に彼らが誰なのか聞いた。」
- (12) a. ɲɔ⁴² [khɻ⁴² khɔ³⁵ le³⁵+ja⁵⁵ =ε⁴⁴] mɔ⁵⁵-su⁵⁵jɔ⁴⁴-a⁴⁴.
 1SG.NOM 3SG.NOM どこ いく + しまう =POSS NEG-知る -PART
 「私は彼/彼女がどこに行ってしまったのか知らない。」
 b. ɲɔ⁴² [khɻ⁴² khɔ⁵⁵ɬu⁴⁴ pja³³ =ε⁴⁴] mɔ⁵⁵-ɲɔ⁵⁵+su⁵⁵jɔ⁴⁴-khju⁴².
 1SG.NOM 3SG.NOM 何 話す =POSS NEG-聞く + 知る -AUX
 「私は彼/彼女が何を言っているのかわからない。」
 c. khɻ⁴² ɲɔ³⁵ [khao⁴² phɔ⁵⁵ =ε⁴⁴] ɲɔ³³-mɛ³⁵.
 3SG.NOM 1SG.OBL 何 買う =POSS 聞く -PAST
 「彼/彼女は私に何を買ったのか聞いた。」
 d. ɲɔ⁴² [khɻ³⁵-pɔ⁵⁵ khɔ⁵⁵-pu⁴⁴ tʰhu⁵⁵ =ε⁴⁴] mɔ⁵⁵-su⁵⁵jɔ⁴⁴-a⁴⁴.
 1SG.NOM あれ.OBL-方 どれ-くらい 寒い =POSS NEG-知る -PART
 「私はあちらの方がどれくらい寒いのか知らない。」

現時点までに採録したデータでは補足節内部の述語が名詞 (11) あるいは動詞 (12) となる場合のみである。この両者に共通している点は (13) である。

- (13) 補足節内に疑問語を配置し、補足節末の境界に =ε⁴⁴ を生起させうる^{注 15}

両者に共通する点は多く、補足節内の述語の名詞性ないし動詞性が補足節全体の構造的な問題に発展することは少ないと考えられる。補足節内部の述語において動詞の肯定形式と否定形式を並列させることもない。補足節内部が疑問要素を含んでいることは形式的にも疑問語が配置されていることすでに明示的である。

注 15 間接疑問語疑問文内の補足節末における =ε⁴⁴ の生起は随意性が高いと現時点では考えられる。

ただし、これまでの調査で、補足節内の述語が名詞である場合と動詞である場合に補足節末境界における差違も認められる。

- (14) a. 補足節内部の述語が名詞である場合、補足節末の境界の明示を文終止助詞 $-a^{44}$ で行いやすい
 b. 補足節内部の述語が動詞である場合、補足節末の境界の明示を時制接尾辞 $-m\gamma$ (過去)/ $-me$ (未来)で行える

(14b)に関連して、補足節内の述語が動詞である場合、以下のような例(15, 16)も容認可能である。

- (15) a. $kh\gamma^{42}$ $\eta\sigma^{35}$ [$khao^{42}$ $ph\sigma^{55} =\epsilon^{44}/ -m\gamma^{44}$] $\eta\sigma^{33}-me^{35}$.
 3SG.NOM 1SG.OBL 何 買う =POSS/ -PAST 聞く-PAST
 「彼/彼女は私に何を買ったのかを聞いてきた。」
 b. $\eta\sigma^{42}$ $kh\gamma^{35}$ [$kha^{55}-lo^{44}$ $a^{33}tja^{55}$ $kh\sigma^{33} =\epsilon^{44}/ -m\gamma^{44}$] $\eta\sigma^{33}-me^{35}$.
 1SG.NOM 3SG.OBL どの-ように 料理 作る =POSS/ -PAST 聞く-PAST
 「私は彼/彼女にどうやって料理を作ったのかを聞いた。」
- (16) a. $\eta\sigma^{42}$ $kh\gamma^{35}$ [$kha^{55}=\epsilon^{44}$ $m\sigma^{55}-le^{44} =\epsilon^{44}/ -me^{35}$] $\eta\sigma^{33}-me^{35}$.
 1SG.NOM 3SG.OBL どの=POSS NEG-行く =POSS/ -FUT 聞く-PAST
 「私は彼/彼女にどうして行かないのか聞いた。」
 b. $\eta\sigma^{42}$ $kh\gamma^{35}$ [$kh\sigma^{55}$ $le^{44} =\epsilon^{44}/ -me^{35}$] $\eta\sigma^{33}-me^{35}$.
 1SG.NOM 3SG.OBL どこ 作る =POSS/ -FUT 聞く-PAST
 「私は彼/彼女にどこに行くのか聞いた。」

補足節内部の述語が動詞である場合、補足節末の境界の明示を接尾辞 $-m\gamma$ / $-me$ で行える理由は単純である。すなわち、これら2種の接尾辞は動詞語根にのみ後接し、意味的には $-m\gamma$ が過去を、 $-me$ が未来を表すからである。これらの時制を表す接尾辞は、形態統語的には動詞を名詞化する機能があり^{注16}、その点で所有格後置詞 $=\epsilon^{44}$ と平行しているように見える。ただし、実際のプロセスは $=\epsilon^{44}$ と時制接頭辞 $-m\gamma$ / $-me$ では異なると見た方がよい。つまり、前者はそれが後接する節全体が名詞節であることを標示するのに対し、後者はそれを含む動詞複合形式全体を名詞化していると考えねばならない。

この点を踏まえれば、以下の例(17)において、 $-m\gamma$ の生起が不可能であることも当然と言えよう。 $-m\gamma$ の後接する要素が名詞($kh\sigma^{33}su^{55}$)だからである。

- (17) $\eta\sigma^{42}$ $kh\gamma^{35}$ [$jo^{33}ma^{55}$ $kh\sigma^{33}su^{55}$ $-a^{44}/ =\epsilon^{44}/ * -m\gamma^{44}$] $\eta\sigma^{33}-me^{35}$.
 1SG.NOM 3SG.OBL 3PL.NOM 誰 -PART/ =POSS/ -PAST 聞く-PAST
 「私は彼/彼女に彼らが誰なのか聞いた。」 (= 11b)

反対に、(14a)に関連して、補足節内部の述語が名詞である場合に、補足節末境界の標識として $-a^{44}$ を用いやすいのは、 $-a^{44}$ が直接疑問文における疑問語疑問文で、名詞述語文に後接できるからであろうと考えられる。

^{注16} 倉部慶太氏のご教示によれば、ジンポー語の未来を表す形式 na^{33} も名詞化の機能があるようである。チノ語悠楽方言の形式とは異なるが、今後チベット・ビルマ諸語において未来形式の形態統語的性格を研究する価値は十分にあると考えられる。これについては別稿に譲る。

4 今後の展開に向けて — 記述的および対照的観点から —

3では、チノ語悠楽方言に間接真偽疑問文および間接疑問語疑問文が用いられることを簡潔に記述した。本節では、チノ語悠楽方言における間接疑問文の記述・分析を更に進める上で、現時点で重要だと思われる問題点を記述的および対照的観点からいくつか言及しておきたい。

4.1 間接疑問文の下位分類と補足節の内部構造

前節で述べたように、間接真偽疑問文は補足節末において動詞の肯定形式と否定形式の並列が見られる。これは明らかに間接疑問語疑問文と構造上異なっている。すなわち、間接真偽疑問文の構造は肯定形式と否定形式を並列されることによって、「問われる命題の真偽」にまつわる選択肢を提示しているわけであり、より正確には「間接選択疑問文」と呼ぶべきかもしれない。

実はこのことは記述言語学的にも言語類型論的にも重要な問題を示唆している。すなわち、間接疑問文も直接疑問文と同様の下位分類の設定が可能か否か、という問題である。

益岡・田窪 (1992: 184) は現代日本語の間接疑問文について、「疑問表現の補足節」の項目において、「補足節になるのは、疑問語疑問文と選択疑問文である」と簡明に記述し、以下の例文 (18) をあげている (例文内の [] の標示は本稿筆者による)。

- (18) a. [太郎がどこで被疑者に会ったか] が問題だ。(益岡・田窪 1992: 184 例文 (22))
b. [太郎が被疑者に会ったか会わなかったか] が問題だ。(益岡・田窪 1992: 184 例文 (23))
c. [太郎が被疑者に会ったかどうか] が問題だ。(益岡・田窪 1992: 184 例文 (24))

もちろん、現代日本語の間接疑問文はこの記述では不十分である。(19) のような例文も存在することから、真偽疑問文も補足節になりうる。

- (19) [太郎が被疑者に会ったか] が問題だ。

現代日本語の間接疑問文における内部構造の更なる問題については江口 (1998)^{注17}、高宮 (2003) などに譲る。ここでは間接疑問文における類型に着目する。現代日本語の間接疑問文の下位分類として意味的には少なくとも「間接真偽疑問文」「間接疑問語疑問文」「間接選択疑問文」の3種を設定することが可能であると言えよう。

一方、漢語普通話では、Li and Thompson (1981: 554–557) で概括するように、補足節内の類型は、疑問語を内包した構造、選言的構造 (disjunctive questions, 「あるいは」を意味する接続詞 *háishi* を挟む)、動詞の肯定形式と否定形式の並列構造 (A-not-A questions) を持つとされる。

Li and Thompson (1981) の例 (20) を引用しておこう。補足節標示 ([]) および強調は本稿筆者による。

- (20) a. nǐ kàn [tā xiě shénme]
you see 3SG write what
'You see what s/he writes.' (Li and Thompson 1981: 554)

^{注17} 江口 (1998) では「どのくらい集まったのか 尋ねた」「参加人数を訪ねた (ママ)」の2文を並列させ、後者の「参加人数」は「参加人数がどれだけであったか」という間接疑問節と同様の解釈をもっている。このような名詞句は「潜伏疑問名詞句 (Concealed Question)」と呼ばれている。本稿では潜伏疑問名詞句の統語的振る舞いに関する分析には立ち入らない。今後の研究課題としたい。

b. wǒ bu xiǎode [shi tā qù hái shì nǐ qù]

I not know be 3SG go or you go

‘I don’t know whether it’s the case that s/he’s going or you’re going.’ (Li and Thompson 1981: 555)

c. wǒ bu zhīdao [tā lái bu lái]

I not know 3SG come not come

‘I don’t know whether s/he is coming or not.’ (Li and Thompson 1981: 556)

(20) の間接疑問文の補足節において、(20a) は疑問語を内包した構造、(20b) は選言的構造を、(20c) は動詞の肯定形式と否定形式の並列構造を有している。(20b, c) はいずれも補足節内に選択肢を提示した構造を持っていると見なせる。以上を整理すると、疑問語を内包した構造は間接疑問語疑問文と関与する。一方、後二者の選言的構造、動詞の肯定形式と否定形式の並列構造は間接選択疑問文と関与すると考えてよい。漢語普通話の間接疑問文が間接選択疑問文と間接疑問語疑問文の 2 種に分類される点はチノ語悠楽方言と類似していると言える。

他方、チノ語悠楽方言の動詞の肯定形式と否定形式の並列形式は、林 (2007b, 2009) でも提示したように、(21) のような直接疑問文としては生起できない。

(21) *nə⁴² le⁵⁵ ma⁵⁵-le⁵⁵?

2SG.NOM 行く NEG- 行く

「あなたは行くのか、行かないのか?」(林 2007b: 70[脚注])

(21) と同内容を表現する際には、以下の (22) のような 2 種類の手法をとらねばならない。

(22) a. nə⁴² le⁵⁵-la⁴²/-ŋa⁴²?

2SG.NOM 行く-Q

「あなたは行くの?」

b. nə⁴² le⁵⁵-la⁴²/-ŋa⁴², ma⁵⁵-le⁵⁵-la⁴²/-ŋa⁴²?

2SG.NOM 行く-Q NEG- 行く-Q

「あなたは行くの、それとも行かないの?」

(22) の 2 例はいずれも直接疑問文である。(22a) は真偽疑問文、(22b) は選択疑問文である。(22a) と (22b) は互いにニュアンスが異なる。しかし、両者は「あなたが行く」という命題の真偽を問う」という点では共通する部分がある。直接疑問文においては (22) の 2 例にみるように、-la⁴²/-ŋa⁴² といった疑問文末を標示する助詞が生起しなければならない。

したがって、真偽疑問を直接疑問文あるいは間接疑問文の補足節で表現する際、両者の構造は全く異なっている。よって、その相互の関係は相補分布をなしていると言ってよい。

漢語普通話では、直接疑問文においても、間接疑問文の補足節においても、動詞の肯定形式と否定形式の並列が可能であることから、この点においてチノ語悠楽方言とは異なると言える。

2.1 の (321b) ですで見たとおり、チノ語悠楽方言の真偽疑問が間接疑問文の補足節内に表現される場合、補足節内では文終止助詞の生起が不可能である。このことから、動詞の肯定形式と否定形式の並列構造によって補足節内が疑問であることを標示していると考えられよう。

4.2 補足節末境界と「間接性」

チノ語悠楽方言の間接疑問文において、前節までにも見たように、補足節末境界として所有格後置詞 =ε⁴⁴ やテンス接尾辞 -mɣ~-mɛ および -me が用いられる。

これらは実際には、補足節末だけではなく、直接疑問文末/ 主節末にも用いられる。

- (23) a. sɔ̃³³-mjo⁵⁵ li³³-mjo⁵⁵ ŋu³³-xɔ̃⁵⁵=ε⁴⁴?
 3-CL 4-CL COP-PART-POSS
 「(それは) 3 年か 4 年前のことだったか?」
- b. khɔ̃³⁵=jə⁴⁴ lə⁴⁴-lu⁵⁵=ε⁴⁴?
 どこ.OBL=から ずっと-来る=POSS
 「(あなたは) どこから来たの?」
- (24) a. khɣ⁴² pu⁵⁵ɕhɛ⁵⁵ ŋu³³=ε⁴⁴.
 3SG.NOM ダイ族 COP=POSS
 「彼/彼女はダイ族だろう。」
- b. khɣ⁴² mi⁵⁵ʃɔ̃⁵⁵ŋ⁴⁴ lɔ̃³³=ε⁴⁴.
 3SG.NOM 明日 来る=POSS
 「彼/彼女はおそらく明日来るだろう。」
- (25) a. ŋi⁵⁵ŋ⁵⁵ a⁵⁵ʃɛn⁴⁴ ŋu³³-mɛ⁴²?
 2DU.NOM アチエン (PSN) COP-PAST.Q
 「(それはおまえと) アチエンの、おまえたち 2 人だったのか?」
- b. nə⁴² khɣ³⁵ lɛ³⁵-mɛ⁴²?
 2SG.NOM あそこ.OBL 行く-FUT.Q
 「あなたはあそこに行くのか?」
- (26) a. ji⁵⁵ji⁵⁵ a⁵⁵phi⁵⁵jo³³kha³³ji⁵⁵-vu⁴⁴, thi³³-mə⁵⁵ se⁴²-mɛ⁴⁴.
 昔 祖母 死ぬ-ので 1-CL 殺す-PAST
 「昔、祖母が死にそうになったとき、(豚を) 1 頭殺した。」
- b. tɕe³³phu⁵⁵ tɔ̃³³+je³⁵-mɛ³⁵.
 酒 飲む + 行く-FUT
 「(彼は) 酒を飲みに行ってしまうだろう。」

(23) は =ε⁴⁴ が直接疑問文末に、(24) は =ε⁴⁴ が主節末に生起している例である。また (25) は -mɣ/ -me が直接疑問文末に、(26) は -mɣ/ -me が主節末に生起している例である。4.1 までに見てきた例を含めて検討すると、=ε⁴⁴ ないし -mɣ/ -me が節末の標示に関与していることまでは言えても、補足節末あるいは主節末のいずれかを標示しているとまでは言明しがたい。

標準タイ語 (27) や日本語 (28) においては、間接疑問文の補足節はそのまま直接疑問文としても成立する構造をとっている。なお、標準タイ語のグロスには本稿筆者による。

- (27) a. ca klàp khuun ní máy?
 IRREAL 帰る 晩 この Q

「(あなたは) 今晚戻りますか?」(Smith 2002: 170)

b. kháw thǎam wâa [ca klàp khuən ní máy]?

3SG 尋ねる COMP IRREAL 帰る 晩 この Q

「彼は(私が) 今晚戻るかどうかが尋ねた。」(Smith 2002: 170)

(28) a. 彼は明日学校へ行くのか?

b. 私は友人に [彼は明日学校へ行くのか] 聞いた。

標準タイ語も日本語も、直接疑問文の構造 (27a, 28a) をそのまま間接疑問文の補足節として配置することが可能である (27b, 28b)^{注18}。

これらの事実は各個別言語の言語学的な単位としての文と節の区別が明瞭か否かという問題に直結する。チノ語悠楽方言を再確認すると、間接選択疑問文と直接真偽疑問文が補足節において相補分布することから (4.1 参照)、形式的に補足節と文終止助詞が付加された主節を明確に区別することができる。主節が文の全体像であると解釈すれば、チノ語悠楽方言において文と節の区別が可能であると言えよう^{注19}。

ここでは間接疑問文の構造の問題を通して、文と節の区別の問題にまで触れた。今後は双方の視点を重視して、更に深い段階に研究を進めたいと考えている。

注18 標準タイ語において máy は直接疑問文の疑問標識としても、間接疑問文の補足節末にも生起しうる。ただし、直接疑問文内部に補足節が存在するとき、その直接疑問の標識として生起し得ない場合がある。このことは田中 (2004: 347) の掲げる次の例 (i) から明らかである (訳の下線は田中 2004 によるが、グロスとタイ語音韻表記は本稿筆者による)。

i) a. dâw khàaw wâa [kháw ca tɛŋjaan] { rú-plàaw / *máy } ?

得る 知らせ COMP 3SG IRREAL 結婚する Q

b. dâw khàaw { rú-plàaw / *máy } wâa [kháw ca tɛŋjaan]?

得る 知らせ Q COMP 3SG IRREAL 結婚する

「あの人が結婚することを聞きましたか。」

しかし、máy が補足節をもつ直接疑問文に生起できないというわけではない。以下の例 (ii) では直接疑問文末に生起可能である (田中 2004: 347)。

ii) khun khít wâa [phaasǎa-Yiipùn yâak] { rú-plàaw / máy } ?

2SG 考える COMP 言語-日本 難しい Q

「日本語は難しいと思いますか。」

田中 (2004: 347) は (ii) を「特定の対象に関する個人的な情報ではなく、一般的な話題への言及に関しては、rú-plàaw も máy も同様に機能する」例 (つまり、補足節内部の意味が máy の生起に関係している) として掲げている。しかし、実際には máy の補足節をもった直接疑問文での生起は主節動詞の意味と主節主語の人称、主節の時制 (三上 (2002: 115) によれば、máy は過去の動作を質す文には生起できない。そのため (i) で máy の生起した例が非文となっている可能性がある) などと関係がある可能性もあろう。いずれにせよ、この点での研究は今後の進展が必要である。

注19 チノ語悠楽方言で文と節の区別は以下の例 (i) でも問題となる。

i) a.ne³³mjɔ⁵⁵tʃoŋ⁵⁵ʃuo³³svɲ⁵⁵ŋw³³-me³⁵. 「来年は(彼は) 中学生だ。」

来年 中学生 COP-FUT

b.ne³³mjɔ⁵⁵tʃoŋ⁵⁵ʃuo³³svɲ⁵⁵ŋw³³-me³⁵-nɔ⁴⁴.

来年 中学生 COP-FUT-SFP

チノ語悠楽方言の文終止助詞は平叙文末を示す -nɔ⁴⁴、疑問文末を示す -la⁴²、-ŋa⁴² などがある。これらは文の末尾であることを標示しているため、それを含む形態素列は「文」である。この観点から考えれば、(ib) は「文」である。一方で、文終止助詞を欠いた形態素列は、述語が存在していても、厳密には「節」と呼ばねばならない。便宜上、それが「文」として事実上用いられていても、それは「節の文的使用」と考えられる。(ia) は厳密には「節」であり、「文」ではないこととなる。

5 おわりに

以上の初歩的なデータの記述と分析によって、チノ語悠楽方言の直接疑問文および間接疑問文の特徴は以下の表1のようにまとめられるだろう。

表1 チノ語悠楽方言の直接疑問文と間接疑問文の特徴

発話の直接性/間接性 疑問語の存在	直接疑問文		間接疑問文	
	[-wh]	[+wh]	[-wh]	[+wh]
a) 疑問を含む節の文内位置	主節と同値		補足節	
b) 疑問を含む節の節末述部形式	NP, VP	NP, VP	VP (V mɔ-V)	NP, VP
c) 節末境界の標示	-la ⁴² , -ŋa ⁴²	-ŋa ⁴² , -a ⁴⁴	共通するのは =ε ⁴⁴	

表1では、まず発話の直接性/間接性の観点から、疑問文を「直接疑問文」「間接疑問文」の2種に分類する。加えて、疑問を含む節内に「誰」「何」などの疑問語が存在するかいなかで更に2種に分類する。存在する場合を [+wh] で、存在しない場合を [-wh] で表示している。すなわち、節のレベルでは4種類の分類を行うこととなる。

次にそれぞれの節に対して、a) では疑問を含む節の文内の位置について、b) では疑問を含む節の節末述部形式が名詞述語であるか、動詞述語であるか、c) では疑問を含む節の節末境界がどのように表示されているのかについて、提示している。

直接疑問文の特徴については林 (2007b, 2009) の結論を整理したものにすぎない。よって、説明を省略する。ここでは間接疑問文の特徴 (表1の右側のコラム) に着目したい。

疑問を含む節の文内位置としては、主節内の補足節に位置づけられる。これは一般言語学的な特徴として見なしてよい。次に、疑問を含む節の節末述部形式であるが、補足節内に疑問語が含まれる間接疑問語疑問文の場合 ([+wh]) では、NP および VP が配置されうる一方で、疑問語が含まれない間接真偽疑問文の場合 ([-wh]) では、VP のみが配置されうる。後者の節末述部形式は上記の通り固定されている (V mɔ-V)。また、疑問を含む節の節末境界の生起については、多様な条件を考える必要がある。現時点で間接真偽疑問文・間接疑問語疑問文のいずれにも共通するのは所有格後置詞 =ε⁴⁴ を用いることであろう。今後は =ε⁴⁴ などの補足節末に生起する要素の多様な条件の記述を進めていかねばならない。

また、4でも述べたように、本稿では扱えなかった問題も含めて、記述言語学的・言語類型論的に今後展開されるべきテーマは少なくない。より一層の研究の進展を図っていきたいと考えている。

[追記・謝辞]:

本稿の作成において、京都大学大学院の倉部慶太氏・富田愛佳氏のご助言とご指摘を頂いた。ここに記して深謝したい。なお、本稿におけるあらゆる事実誤認・誤謬は当然ながら筆者個人に帰する。

略号一覧

文頭の * は非文であることを示す。また ‘-’ は接辞類・助詞類の境界を、‘=’ は倚辞の境界を、‘+’ は語根の境界を表す。

AUX: 助動詞、CL: 類別詞、COMP: 補文標識、COP: コピュラ、DU: 双数、FUT: 未来、IRREAL: 叙想法、NEG: 否定、NOM: 主格、OBL: 斜格、PART: 助詞、PAST: 過去、PFT: 完了、PL: 複数、POSS: 所有格、PREF: 接頭辞、PSN: 人名、Q: 疑問、SFP: 文終止助詞、SG: 単数

参考文献

- 江口正 (1998) 「引用節・間接疑問節と内容名詞句の共起関係について」『愛知県立大学外国語学部 紀要 言語・文学編』30: 325–344.
- 戴慶廈 (Dai Qingxia) (主編) 2007. << 基諾族語言使用現狀及其演變 >> 北京: 商務印書館.
- 蓋興之 (Gai Xingzhi) (1986) << 基諾語簡誌 >> 北京: 民族出版社.
- 林範彦 (2006) 「チノ語悠楽方言」『文法を描く—フィールドワークに基づく諸言語の文法スケッチ—』 pp. 243–270. 府中: 東京外国語大学アジア・アフリカ言語文化研究所.
- 林範彦 (2007a) 「チノ語悠楽方言の記述的研究」京都大学博士論文.
- 林範彦 (2007b) 「チノ語の疑問文末に現れる 3 つの助詞について」『言語研究』第 131 号. pp. 45–76.
- 林範彦 (2009) 『チノ語文法 (悠楽方言) の記述研究』(神戸外大研究叢書第 43 冊) 神戸: 神戸市外国語大学外国学研究所.
- Hayashi, Norihiko (in print a) The so-called possessive marker in Youle Jino. In *The Collection of the 40th International Conference on Sino-Tibetan Languages and Linguistics*. Harbin: Heilongjiang University Press.
- Hayashi, Norihiko (in print b) A Brief Description of Youle Jino Copula. 『アジア言語論叢 8』 pp. 1–25. 神戸: 神戸市外国語大学外国学研究所.
- König, Ekkehard and Peter Siemund (2007) Speech act distinctions in grammar. In Timothy Shopen (ed.), *Language typology and syntactic description 1: Clause structure*. (Second Edition) pp. 276–324. Cambridge: Cambridge University Press.
- Li, Charles N. and Sandra A. Thompson (1981) *Mandarin Chinese — A Functional Reference Grammar —*. Berkeley, Los Angeles and London: California University Press.
- 益岡隆志・田窪行則 (1992) 『基礎日本語文法 改訂版』東京: くろしお出版.
- 三上直光 (2002) 『タイ語の基礎』東京: 白水社.
- Sadock, Jerold M. and Arnold M. Zwicky (1985) Speech act distinctions in syntax. In Timothy Shopen (ed.), *Language typology and syntactic description 1: Clause structure*. pp. 155–196. Cambridge: Cambridge University Press.
- 邵敬敏 (Shao, Jingmin) (1996) << 現代漢語疑問句研究 >> 上海: 華東師範大学出版社.
- Smith, David (2002) *Thai: An Essential Grammar*. London: Routledge.
- 高宮幸乃 (2003) 「現代日本語の間接疑問文とその周辺」『三重大学日本語学文学』14: 116–104.
- 高宮幸乃 (2005) 「格助詞を伴わないカの間接疑問文について」『三重大学日本語学文学』16: 104–92.
- 田中寛 (2004) 『統語構造を中心とした日本語とタイ語の対照研究』東京: ひつじ書房.